

2017年——幾つもの節目と農学部の夢

小野正人（農学部長、農学研究科長）

玉川大学が旧制最後の大学として設置認可されたのは昭和22（1947）年のこと、「文農学部」として高等教育の世界への船出となった。その後、新制大学としての認可、学部学科改組を経て遂に、昭和52（1977）年には大学院農学研究科資源生物学専攻の設置に至り、修士課程が開設された。さらにその2年後、昭和54（1979）年には博士課程後期が整い、学士、修士、博士と一貫した高等教育が展開できる基盤が整った。2017年は、学士課程70年、修士課程40年、そして博士課程後期38年と各々が設置された記念にあたる節目の年である。こうして、70、40、38と3つの数字を並べてみると博士課程後期の38年だけが中途半端なように見えるが、本学の教育と研究の中で「ミツバチ：38（図1）」は国内外に知れ渡るところとなっており、ここは語呂合わせでということになる。建学以来「全人教育」という一貫した教育理念のもとで、学士10,433名、修士379名、そして博士74名を輩出してきた。現在では、多くの卒業生が人財として、様々な場面で国際的に活躍している。



図1 ミツバチ研究が着手されたのは1950年、黄色いコスモス（イエローガーデン）は30年以上の育種学研究が実り1987年に品種登録された

昨今の大学を取り巻く社会情勢の変化には激しいものがある。凄まじい速度で進む国際化の中で、第一次産業の農業にもその波が押し寄せている。世界人口は増加しているが、その一方で日本の人口は減少の一途を辿り、少子高齢化という深刻な状況となり、年齢構成は高齢者増、若齢者層減といった逆ピラミッド型に急ピッチで進んでいる。少数の若者が多数の高齢者を支えなければならない方向に社会の構造が進んでいるのである。大学にとっては18歳人口も減少する中で、如何にして前述のような方向に進む社会のニーズに応えられる人的資本が育つ環境を形成するかが重要な課題と言える。

玉川大学の農学部では、外的環境から培われる人間として備えるべき共通の「基本的資質」と己の力で見つけて研く自分ならではの「魅力的な個性的資質」の両方を育む大学環境の形成に注力してきた。その一つの手段として、学生と教員が一体となるコミュニティー化を図り、ややもすると「タコ壺式」、「Department Silo」と評される閉鎖型の研究室運営から脱却し、複数の教員からなる領域環境で学際的な教育と研究を進める方向に大きく舵を切ってきた。学長のリーダーシップのもと、全人教育をベースとしたこの学際的な教育と研究が、ELF (English as a Lingua Franca: 意思の伝達手段としての英語) と相まって国際的な舞台での力強い“協働力”を発揮できる人的資本の育成につながるのではないかと感じている。

農学部と農学研究科の主たる活動場所には、創立者の筆跡による2つの象徴的な石碑（図2）が鎮座している。1つは、「農為國本」である。文字通り、「農」は国家の基本であり、土台となる大切なものであり、食料生産に直接関わる第一次産業なしには、他の産業は起こりえないことは歴史が物語って



図2 青空に映える「農為國本」と先達の教えを刻んだ石碑
この2つの石碑は向かい合って鎮座している

いる。その精神のもとで、基礎学問に真摯に向き合い、他の分野との融合によって第二次産業が興り、工場内での野菜や魚介類の生産といった技術革新につながっている。さらに、生産物を流通、提供する第三次産業へと展開、急速にグローバル化が進む現代では、それらを総合した農産の第六次化がうたわれている。そのような時代の流れの中で、もう一つの石碑に刻まれた「この秋に 雨か風かは知らねども 今日のため 田草とるなり」の言葉は示唆的である。今の時代、いつどのようになるのか予測できないが、とにかく目の前のやるべきことを着実にこなしていくこと、それが行き当たりばったりではなく、臨機応変に物事に対処できる有様につながるというのは、未来を見据えていた賢人の教えと言えよう。

21世紀の100年間を人類が生き抜く鍵を握る「食料」、「環境」、「エネルギー」など「生きていくこと」に直結する重要な課題は、全て地球を育む農学につながっている。それらを解決するのに大きな「夢」をもって挑戦し研究するのは人であり、その人を育てるのが教育である。ESTEAM教育を念頭に置き、「理論と実践」のバランスがとれた国際的、学際的な大学環境の中からこそ「地の塩、世の光」となる「これからの時代に必要とされる人材」が育つのではないかと思われる（図3）。そして、そのような人を世に送り出すのが70周年を迎えた玉川大学農学部のもそのものでもある。



図3 ELF、Science、Technology、Engineering、Arts、Mathematicsの頭文字をとったESTEAM教育のサインとスピーカーが内蔵された絵画を手に学際的研究の重要性とその成果の社会実装化の意義を唱える小原芳明学長（本学大学院研究科交流会での講演にて）